

学園都市づくり交流会議では、東広島市における学生等の学術研究活動を促進し、大学と地域が連携したまちづくりの推進に寄与することを目的に東広島市の地域課題を研究した論文を募集・表彰する「地域課題研究懸賞論文事業」を実施しています。

この度、令和元年度の受賞論文について、厳正な審査の結果、6件決定しました。

なお、受賞論文については、著者個人の意見であり、学園都市づくり交流会議及び東広島市の公式見解ではありません。

## 令和元年度地域課題研究懸賞論文 受賞論文（佳作①）

研究課題名（テーマ）

吾妻子の滝の歴史と「西条散策マップ」の作製

広島大学 教育学部 第二類 村上 正龍

令和元年度地域課題懸賞論文

吾妻子の滝の歴史と  
「吾妻子の滝散策マップ」の作製

広島大学教育学部第2類社会系コース

村上正龍・杉山愛実

## 目次

	頁
I.はじめに .....	1
II.研究方法 .....	1
III.吾妻子の滝に関わる歴史	
1 滝周辺の地形史 .....	3
i. 調査結果	
ii. 考察	
2 滝周辺の歴史 .....	6
i. 古代 長者スクモ塚古墳群	
ii. 中世 菖蒲の前伝説	
iii. 近世 吾妻子の滝の図	
iv. 近現代 三永水源地	
IV.吾妻子の滝散策マップ	
1. マップ作成の目的 .....	15
2. マップの作成方法 .....	15
V.おわりに .....	17
【謝辞】 .....	17
【参考文献】 .....	18

## I.はじめに

本研究の目的は3つある。1つは、東広島市の観光名所である吾妻子の滝の成因を明らかにすることである(図1\_位置図、図2\_ドローンの空撮)。既存の研究で吾妻子の滝の成因について明らかにしているものが存在しない。そこで、その成因を解明することを目的としてこの研究を行った。

2つ目は、滝の地形があったからこそ生じた、独特な歴史的な事象を整理することである。3つ目は、上記の結果を反映した吾妻子の滝に関連する歴史や周辺の歴史をまとめ、一つの地図に表現した、「吾妻子の滝散策マップ」の作製である。今回、研究した場所を明確にし、地域の人でも、観光客の人でも、大人でも子どもでもわかり、歩いて回るために持ち運べるような地図を作ることで、より多くの人々が吾妻子の滝の地形や歴史について手軽に知り、興味を持つことをめざした。

## II 研究方法

吾妻子の滝の成因を考えるためにまず、吾妻子の滝周辺の地形を理解する必要がある。そのために、地形改変が少ない米軍により1945年に撮影された空中写真を実体視し、地形判読を行い、地形分類図を作成した。この図に基づいて、地形発達の過程を検討し、その検討に基づいて現地調査を行った。現地調査では、基盤や堆積物の層相、厚さ、高度などを柱状図にまとめ、それぞれの地層がどのように発達しているのかをまとめた。高さの計測にはレーザー測距器(Thruplus200)を用いた。また、それぞれの調査した地点の位置をスマートフォンアプリ(Geographica)によって計測し、マッピングをおこなった。上記の地層に関する情報と地形の関係を明らかにするため

に、地形地質断面図を作成した。断面図の作成にあたっては、地理院地図を活用して断面図を作成した。

また、現在の地形の様子を立体的に分かりやすく表現するために、空中写真を用いて3Dモデルの作成を行った。写真はドローン(Mavic II pro)により空撮を行い、写真2の作成のために88枚、写真5の作成のために84枚の写真を撮影した。その写真をSfM(Structure from Motion)-MVS(Multi-Video Stereo)ソフトPhotoscanを用いて、3Dモデルを作成した。

一方、滝の歴史的な事象の整理については、既存文献を元に整理を行った。ただし、三永水源地周辺の石標の調査は、筆者等及び広島大学大学院教育学研究科の大学院生の協力を得て実施した。



図 1 三永水源地の位置 (図中の黒枠は第 3 図の範囲を示す)



図 2 ドローン撮影による吾妻子の滝周辺の空中写真

### III 吾妻子の滝に関わる歴史

#### 1 滝周辺の地形史

##### i 調査結果

まず、1945年米軍により撮影された航空写真を用いて地形判読を行った結果を、QGISを用いて表現した(図3\_地形分類図)。同じ色の面が同じの高さの面となるように色を塗り分けている。I面からVIII面まで、数が大きくなるにつれて高度が低い面となっている。

次に、現地調査により分かった地層の様子は柱状図で表現した(図4\_柱状図)。河床の高さを0メートルとして高さの測定を行っている。地点1、地点2はそれぞれ観察地点である。また、2つの柱状図をつなぐように、地形地質断面図を作成した(図5\_地形地質断面図)。地形地質断面図の測線は図3に示した。

##### ii 考察

地形判読の結果や、現地調査の結果から考

えられる吾妻子の滝の成因を、既存の研究によって明らかにされている情報も交えながら以下に述べる。

東元ほか(1985)によると、西条層の堆積は50万年以上前である。黒瀬川の本流は、板城から三升原を通り現在三永水源地があるところを北に向かって流れていた(中田・町田、1989)。その後、さらに下流のせき止めにより、西条盆地全体に広がる湖となり、砂や泥が湖底に徐々にたまってきた。このようにして堆積したのが西条層である。水源地の近くでは黒瀬川の河床から上まで湖や川の地層が20m以上堆積しているのが観察できる(図4、図5\_露頭写真)。地形分類図においてI面とあらわされているものは中田・町田(1989)で高屋面と分類されるものである。また、II面とあらわされているものは中田・町田(1989)の三升原面と分類されるものである。中田・町田(1989)によると、高屋面は、白市盆地から西条盆地にかけて、高度250から260メートル以下に発達する湖成面である。高屋面は白市盆地の広い地域を尾根上の平坦面として占めている。白市盆地では基盤の花崗岩は東にな

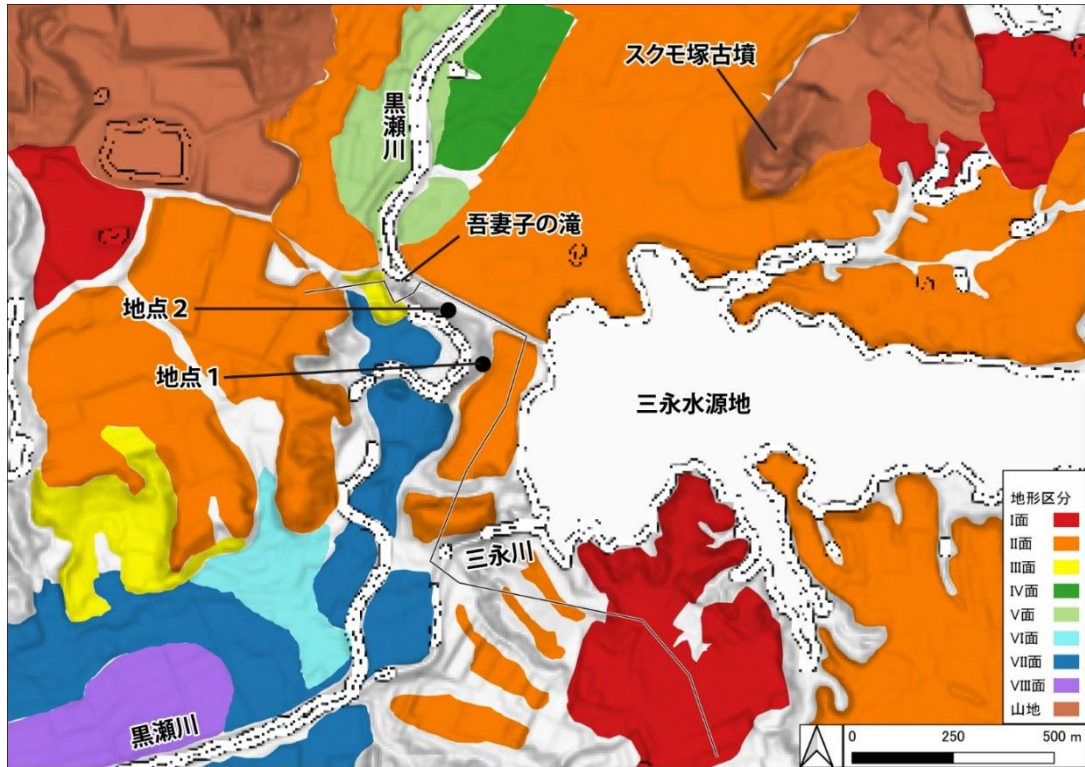


図 3 吾妻子の滝周辺の地形分類図（図中の地点 1・2 は第 4 図の調査地点、黒線は第 5 図の地形地質断面図の測線を示す。）

るほど高くなり、堆積物も一般に東になるほど粗粒かつ薄くなる傾向があり、湖形成前の入野川は西方に流下し、黒瀬川の流域に属していたことを示している。白市盆地東部には高屋面を形成した湖を侵食基準面として形成された小起伏の丘陵が発達する。西条盆地の北部では周辺山地を縁どるように分布し、高屋面は黒瀬盆地には発達が見られない。西条盆地の南部では黒瀬川の現流路は龍王山の西端で基盤岩を開析して峡谷を形成しているが、龍王山の東では松坂川の谷は厚い赤色風化した礫層より堆積されており、現河床に基盤岩は露出していない。このことから前述のようにかつての黒瀬川の流路は、松坂川的位置にあったが、支谷からの多量の礫の供給によって堰止めが起り、湖が形成されたと推定される。また、三升原面は、西条盆地南部を中心に高度 220 メートル以下に発達する湖成面で、西条層を不整合に覆う比較的薄い（7 から 10 メートル）砂礫層になる。地形的にも高屋

面とは不整合の関係にあり、開析の進む高屋面の下位に開析谷を埋めるように分布している。この砂礫層の特徴は、偽層理が発達し、粘土層、シルト層が厚くないことである。吾妻子の滝北部では黒瀬川の谷頭侵食が滝を形成する花崗岩によって食い止められ（西亀, 1912, 西村, 1949）、三升原面が広く保存されている。西条周辺では、この面上に沖積層の被覆が進み、条里遺構の残存する広い盆地底を形作っている。この面は、黒瀬盆地では開析が進み、低い平頂尾根として認められ、西条盆地南部と比較して、全般的に保存がよくない。

50 万年以上前、黒瀬川の本流は、板城から三升原を通り、現在三永水源地があるところを北に向かって流れていた（図 5 ①）。その後、さらに下流のせき止めにより、西条盆地全体に広がる湖となり、砂や泥が湖底に徐々にたまってきた（図 5 ②）。水源地の近くでは黒瀬川の河床から上まで湖や川の地層が 20m 以上

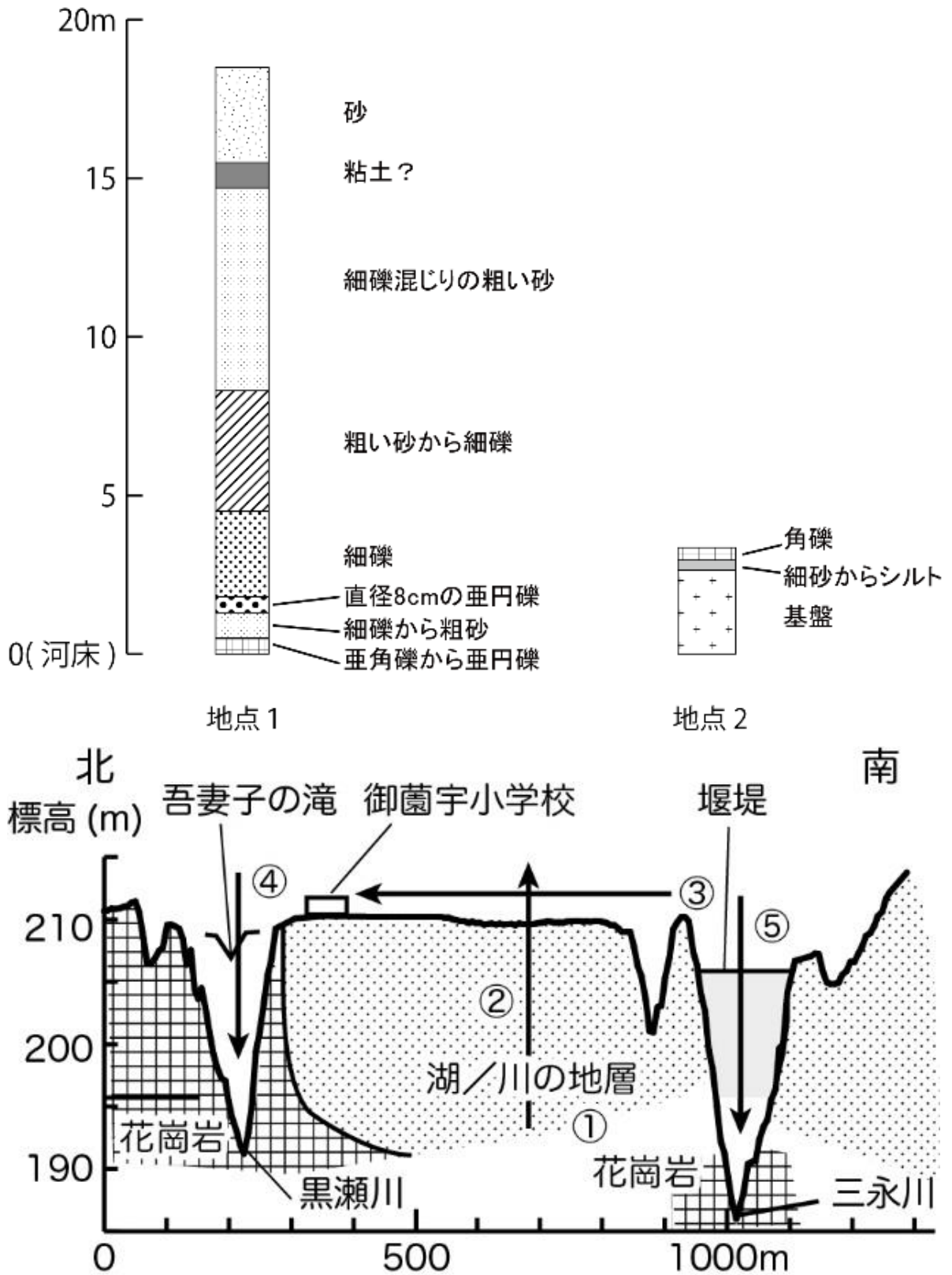


図 4 二点の柱状図（上）と地形地質断面図（下）

堆積しているのが観察できる。この時に、I面が形成された。

その後のある時期に、現在の流れである郷

田から流れはじめ、再び黒瀬川による侵食がはじまった。初めは川が蛇行しながら浸食して、II面が形成された（図5③）。



侵食が進んだところで、黒瀬川の本流はいまの吾妻子の滝のところを流れていた。その地点は湖や川の地層が薄く、その下は硬い花崗岩だったため、川が一旦花崗岩まで侵食をはじめてしまうと、川は左右に移動できなくなり、結果としてそのまま削り込んで滝となった(図5④)。そして、現在の水源地があるところは、黒瀬川支流の三永川により湖の地層が侵食された。三永川が黒瀬川に合流する付近にも花崗岩があったために狭い谷になった。

また、河川沿いのIV面、V面、VII面、VIII面は谷底平野である。谷底平野とは河川が平野部に出ると河川の運搬力が弱まるために、土砂が堆積することでできる平坦な土地のことである。

## 2 滝周辺の歴史

### i 古代

#### 長者スクモ塚古墳群

ここでは、古代の吾妻子の滝周辺の様子として長者スクモ塚古墳群について紹介する。まず、東広島市内のいくつかの古墳時代の主要な遺跡を概観する。下江ほか(2018)によると、長者スクモ塚古墳群は広島県東広島市西条町御菌宇に所在し、世羅台地から南西へつづく賀茂台地西部、西条盆地南西の西条町にある独立した丘陵上(現広島大学西条共同研修センター裏山)に位置しており、周辺平地からの比高は約30mである。

大上(1993)によると、高屋町才が迫第1号古墳は墳丘長約11.2mの方墳であり、出土土器などから4世紀初頭に位置づけられている。また、出野上(2003)によると、同じく高屋町原の谷古墳は墳丘径(長)約23.5mの円墳または方墳であり、才が迫第1号古墳につづく

4世紀前半の築造とされている。松崎(1979)、古瀬(1991)によると、4世紀後半になると、西条町でも古墳が築造される。西条町白鳥古墳は墳丘規模などが明らかでないものの、仿製三角縁神獣鏡の出土が伝えられており、4世紀後半に位置づけられている。また、藤野(2015)によると、西条町丸山神社第1号古墳は墳丘長約42.9mの帆立貝形古墳とされており、出土した壺形埴輪から4世紀末の築造とされている。さらに、古瀬(2010)によると、高屋町千人塚古墳は墳丘径約24.0mの円墳であり、出土遺物から4世紀末の築造とされている。

古墳時代中期になると、西条町に墳丘長約92.0mの前方後円墳である三ッ城第1号古墳が築造される。石井(2004)によると、造出から出土した須恵器や埴輪などによって5世紀前葉の前方後円墳と位置づけられている。三ッ城第1号古墳以降、当盆地ではしばらく有力墓の造営が途絶えるが、高屋町森信第1号古墳は墳丘長約30.0mの前方後円墳であり、石井(1990)によると、表採された遺物などから5世紀末葉から6世紀初頭頃の築造とされている。

古墳時代後期になると、西条盆地でも横穴式石室をもつ古墳が築造される。西条町助平古墳は墳丘径約12.0mの円墳であり、竪穴系横穴式石室をもつ。石井(1992)によると、出土遺物から6世紀中葉の築造と想定されており、西条盆地における最古の横穴式石室をもつ古墳である。その後も横穴式石室をもつ円墳が多く築造されており、代表的なものとして高屋町原田岡山第1号古墳(恵谷1994)や西条町御菌宇龍王山古墳(脇坂1997)などが挙げられる。

長者スクモ塚古墳群の概要について、いくつかの文献に記載があるがここでは、『広島県史』と『前方後円墳集成』の記述について、紹

介する。

『広島県史』(松崎 1979) 1979年刊行の『広島県史』によると、長者スクモ塚古墳群は3基の円墳で形成され、いずれも5世紀代のものと推定されている。第1号古墳は墳丘径約40.0m、高さ約6.0mの円墳で南西部に造出をもち、墳丘に葺石や円筒埴輪が認められるとされる。第2号古墳は墳丘径約10.0mの円墳で墳頂に箱形石棺があるとされる。第3号古墳は墳丘径約8.0m、高さ約2.0mの小円墳で、墳頂に2基の箱形石棺があり、石棺内から人骨、獣形鏡1面、管玉2点、鉄刀子片などが出土したとされる。なお、『広島県史』に記載されている第3号古墳は現在の第2号古墳を指しており(永野 2018)、先述したように当古墳群の号数は過去に変更されていたことが判明した。

『前方後円墳集成』(古瀬 1991) 1991年刊行の『前方後円墳集成』によると、長者スクモ塚第1号古墳は墳丘長約63.0mの帆立貝形古墳とされる。広島県の帆立貝形古墳のほとんどが前方後円墳集成編年の7期以降であることから、集成編年6期の三ッ城第1号古墳より長者スクモ塚第1号古墳は後出するものとされている。一方、注釈では糸井大塚古墳で

表採された埴輪の検討から、広島県における帆立貝形古墳の出現が集成編年6期以前となる可能性が高いことも指摘している。これにより、長者スクモ塚第1号古墳と三ッ城第1号古墳との編年的位置づけが逆転する可能性が指摘された。

第1号古墳の築造時期について考察すると、野焼き焼成により製作された可能性があることや、円形以外の透かし孔が存在する可能性が高いことから、川西編年Ⅱ期からⅢ期に比定され(川西 1978)、前方後円墳集成では4期後半から5期に(広瀬 1991)、実年代では4世紀末から5世紀初頭にあてはまる。このことから、長者スクモ塚第1号古墳の築造時期は、5世紀前葉に比定されている三ッ城第1号古墳より以前に遡る可能性が高いとみられる。

さらに、永野(2018)によると、長者スクモ塚古墳第2号古墳は長者スクモ塚第1号古墳に後出する5世紀初頭前後の築造とされている。墳丘径約22.0m、現状の高さ2.2mの円墳、もしくは墳丘長約28.5m、後円部径約18.3m、現状の後円部高2.2m、前方部長10.2m、前方部前面幅約8.8m、前方部高約0.75mの前方後円墳と推定される。前方後円墳の場合、墳丘主軸は北東-南西である。また、当古墳におけ



図5 スクモ塚古墳群の説明看板

るこれまでの知見を整理し、現在第2号古墳とされている古墳は、従来第3号古墳と呼称されていたこと、現第2号古墳には石棺が2基存在しており、獣形鏡などの副葬品が出土したが、現在は散逸していることなどを指摘している。さらに、現在第3号古墳とされている古墳は現第2号古墳の付近に存在していたが、現状では確認できず、埋葬施設や副葬品な

どの詳細も不明である。

現在の長者スクモ塚古墳群の様子を3Dマップの形でまとめた。ドローン空撮を行った写真を、フォトスキャンを用いて重ね合わせ、3Dマップの形にしたものである。ただし、photoscanの動作上、一部3Dに正しく反映されなかった部分がある。



図 6 スクモ塚古墳周辺の3Dマップ

ii 中世  
菖蒲の前物語

ここでは、中世の吾妻子の滝の様子として菖蒲の前物語について検討する。「菖蒲の前物語」は、この地域に伝説として伝わっている物語である。吾妻子の滝や御藪宇村などは、「菖蒲の前物語」と関係の深い地名であるといわれている。

伝説では、菖蒲の前という女性が、夫である源頼政を源平の争乱で失い、都から西条へ逃れた後の話が中心に語られている。この物語

は、都で名をはせていた源頼政と菖蒲の前が会うところから始まる。

登場人物は、主に6人である。菖蒲の前、その夫の源頼政、頼政の家来の猪俣太、頼政の息子である種若丸と水戸新四郎頼興、菖蒲の前の侍女である鶴姫である。

1180（治承4）年、源頼政は、横暴な振る舞いをしていた平家を倒すため、以仁王を奉じて、平家討伐の計画を立て、戦の準備を進めていた。しかし、この計画が平家方にばれたため、平清盛は激怒し、源頼政征討の兵を挙げた。平家と一戦交えることとなった頼政は、宇治川の戦いに敗れ、宇治の平等院で、辞世の句



図 7 観音堂

「埋もれ木の 花咲くこととも なかりしに  
みのなるはてぞ かなしかりける」(訳:埋もれた木の花の咲くことがないように、私の生涯も時めくこともなく、その身の最期もまた悲しいものだなあ)を残し、渡辺唱の介錯で腹を切って、自害した(享年77歳)。平家方は、謀反を企てた頼政の妻・菖蒲の前にも、その責任を追及しようとした。宇治川の戦いで夫を失った菖蒲の前は、平家方の追手から逃げるために、妊娠している状況であったが、西国へ逃れることとなった。身重の身である菖蒲の前は、3歳になる若君(息子)の種若丸と共に、猪俣太に守られながら、安芸国に落ち延び、賀茂郡下原村(現:西条町御藪宇)の「千尋の滝」の岩屋に身を隠した。しかし、岩屋で数日体を休める間に、種若丸は長旅の疲れがもとで病気にかかり、病死してしまった。悲嘆にくれた菖蒲の前は、平家方に気づかれぬように、ひっそりと自分で種若丸を埋葬し、滝のそばに御

堂を建てた。その墓は、後に「滝の観音」と呼ばれるようになった。

菖蒲の前は、種若丸をかわいそうに思い、歌「吾妻子や 千尋の滝の あればこそ 広き野原に 末を見るらん」(訳:種若丸よ、千尋の滝でいるのならば、今この広い野原で行く先を見ているのだろう)を詠んだ。それ以来、「千尋の滝」は「吾妻子の滝」と呼ばれるようになり、滝のある一帯を「東子」と呼ぶようになったと伝えられている。その後、菖蒲の前は、彼女の身の上話を聞いて同情した寿福寺(現・得行寺)の住職の計らいにより、このお寺に身を寄せ、豊丸を出産した。成人後、豊丸は水戸新四郎頼興と名乗った。菖蒲の前は、庵を建立し、頼政の像と、頼政の守本尊であった一寸八分の観音像を納めた。これが、今の勝谷山観現寺の起源である。



図 8 勝谷山観現寺

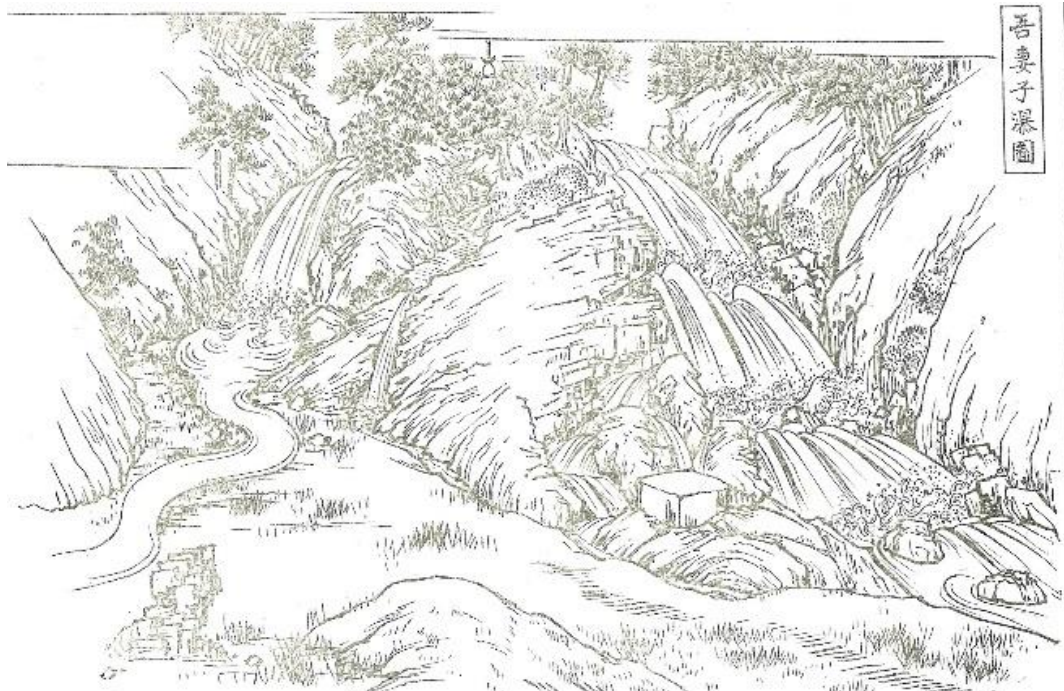


図 9 「吾妻子瀑図」(『芸藩通史』より、上) と吾妻子の滝の 3D マップ (下)

iii 近世  
吾妻子の滝の図

「吾妻子瀑図」の中心部にみられる石も存在する。雄滝についてはivで考察する。

吾妻子の滝は安芸国広島藩により、文政8年(1825年)に完成された、『芸藩通史』にも「吾妻子瀑図」として表記がある。

私たちは現代の吾妻子の滝の様子を図と同じような角度でドローン空撮を行い、3Dマップ化を行った。写真は2020年1月9日に撮影を行った。比較してみると、現在も「吾妻子瀑図」に描かれている雌滝があるのがわかる。吾妻子の滝の紹介看板にも記載がある。また、

iv 近現代

三永水源地・石標跡・白牡丹石碑

近現代の吾妻子の滝周辺の様子として、ここでは三永水源地と、それに関係しているとみられる石標、白牡丹の歴史について検討する。三永水源地は重力式コンクリート造の堰堤を持ち、その長さは100m、高さは14.2mという巨大さを誇る。戦時中につくられたコン



図 10 吾妻子の滝の説明看板

クリート造の堰堤ということもあり、1986年に近代水道百選、1999年には国の登録有形文化財にも登録されている。

三永水源地は東広島市の市域にありながら、呉市が水利権を有しており、水源地を管理しているのは今でも呉市水道局の職員である。水源地の水は、呉市の飲料水としてかつて利用されていたが、現在では東広島市内にある工業団地の工業用水として利用されている。

三永水源地の築造は、戦前、呉が軍港として発達したことにはじまる。当時の呉市は、戦艦大和の建造に代表されるように、海軍だけでなく艦艇や兵器をつくる軍需産業も盛んであった。そのため、人口が増加し、水不足の不安を抱えていた。そこで、水源を方々探した結果、呉市から 20km 離れた旧三永村打田地区を水源地の候補地として選んだ。三永川を堰き止めるだけでなく、黒瀬川の水も導水路から引き入れる計画であった。打田地区が選ばれた

地形的な理由としては、ここが三永川の浸食により周囲より土地が低かったこと、三永川が黒瀬川に合流する手前に狭い谷になった箇所があり堰の長さが短くてすむことが挙げられる。この工事は、堤の工事はもとより、水源地から呉の平原浄水場までのトンネルを含む専用水道を敷設したこともあり、1938年から1943年までかかった。戦時下であったこともあり、資材の調達には苦勞したようだが、呉市長が上京して政府機関への陳情や、海軍当局から強力な支援などにより築造は進められた。軍都「呉市」に対する給水は急を要したため、水道局職員課長以下総出で、作業は3交番制を採用、昼夜兼行の突貫工事であった。これらの経緯は堰堤に残る石碑に記載されている。一方で、水源地の湖底には多くの田畑や立ち退きを余儀なくされた住民43戸の家屋などが沈んでいることを忘れてはいけない。立ち退きをした人は、下三永の向原地区などへ移転

している。

三永水源地には藤棚がある。1945年に、当時の水源地管理主任が貯水池のほり 300m にわたり、約 100 本余りの藤を植え、水道パイプの廃材を利用して藤棚を作った。その後、

見事に成長し湖水や周囲の木立の緑と調和した景観をなすようになった。現在は例年 3 月下旬から 5 月中旬にかけて一般開放されており、桜や藤を楽しむこともできる。



呉市上水ハモト海軍用水ノ分譲ニ依存シ市ノ發展ト共ニ漸ク給水ノ不足ヲ告グ仍チ昭和四年以降新水源ヲ求メ調査研究數箇年然モ未ダ決定ヲ見ルニ至ラス渴水ノ苦惱愈切ナリ昭和十二年貴族院議員水野基次郎氏呉市長トナルヤ深ク事態ヲ憂ヘ蘊蓄ヲ傾テ構想ヲ練リ終ニ此ノ地ニ貯水池ヲ築調スルノ大計畫ヲ樹テ昭和十三年創テ工ヲ起ス然ルニ時局ハ漸ク深刻化シ資材勞務ノ逼迫甚シク爲ニ巨費ヲ追加シ鋭意進捗ヲ圖ルト雖モ前途全ク迷暗ス可ラス而モ氏ハ飽追企畫ノ遂行ヲ期シ或ハ數次ニ巨額私財ヲ投シ或ハ打開ノ途ヲ中央要路ニ懇請スル等日夜渾身ノ努力ヲ傾倒シテ己マス苦卓慘愴政府ノ補助貳百萬圓ヲ得ルニ及ビ愁眉始テ開ク之ヨリ工程着々進ミ大戦ノ時艱ヲモ辛ニ突破スルヲ得昭和十八年遂ニ宿望ノ大業ハ成レリ起工後實ニ六箇年經費總額八百九拾七萬圓然テ新水源ハ有効貯水量貳百六拾四萬噸送水路全長正ニ貳拾六軒滾々不盡ノ清水ハ遠ク呉市ニ通シ永ヘニ其繁榮ヲ□□フモノノ如シ予工事ノ未明不揣毛氏ノ後ヲ承テ之力完成ノ日ニ遇々前諸ヲ頌テ無量ノ感激ニ堪ヘス仍チ茲ニ水野市長心血ノ功業ヲ讃工勤シテ以テ後是ニ傳ス  
昭和二十年十一月 呉市長鈴木登 議

図 11 近代水道百選の碑（上）と呉市上水道竣工記念碑（下）



また、水源地近くの導水路にかかる橋のたもとから東の道路沿いに、「呉水」と書かれた石標を多数見つけることができる。石標には通し番号が振られており、水源地を囲むように設置されたと見られる。さらに、水源地から呉の平原浄水場までは、専用の水道管で水が送られていた。田口周辺の水道管の敷設位置は、今ではわからない。しかし、もみじ銀行の駐車場や田の畦、あるいは家の敷地の中に、互いに幅3～4m離れた2基の「呉水」と刻まれた石標があり、両石標の間に水道管が埋設されていた。石標の位置を並べると、落合橋に向かって西南西方向にほぼ1直線となる。橋をこえたところに呉市水道局の施設があり、さらに「呉水」の石標の列は続くが、その向きは南西方向に変わる。自宅の敷地内に石標がある90代の男性に何うと、溝を掘り土管を埋めていたこと、その工事は、朝鮮からの労働者がやってきて作業していたとのことである。水道管がこわれて水田に水があふれたこともあったという。いくつかの石標には通し番号が

振られていて、水源地に近い方から六、二三、四四、四五、四六の番号の石標を確認した。石標の番号はおそらく呉の平原浄水場まで続いているのではなかろうか。石標を設置する位



図 12 呉水石柱



図 13 白牡丹精米白場趾



図 14 水車のレプリカと雄滝跡

置は、道路と耕作地の間など土地利用が異なる地点や、崖の基部など地形の傾斜の違う地点と考えられる。今では、その存在が忘れ去られた石標であるが、石標は、戦争とこの地域の関わりを物語る文化財といえよう。

吾妻子の滝の付近には白牡丹の歴史が刻まれた石碑がある。石碑からは、白牡丹が江戸時代から大正時代にかけて吾妻子の滝を用いて大きな水車を回し、原料である米を精臼していたことがわかる。

白牡丹は延宝3年(1675)に創業し、西条で愛されてきたお酒である。現在も水車のレプリカが残っている。また、『芸藩通志』内の「吾妻子瀑圖」から推測すると、図における滝の位置や高さから、ここが前述の雄滝にあたる場所だったのではないかと考えられる。

#### IV. 吾妻子の滝散策マップ

##### 1 マップ作成の目的

本論文での調査結果と考察をもとに、吾妻子の滝とその周辺について学ぶことができる散策マップを作成した。この散策マップは吾妻子の滝やその周辺地域を誰でも身近に感じることができ、吾妻子の滝を東広島市の観光地として活性化させることに加え、この散策マップを地域学習の補助教材として、学校現場でも活用できるようにすることを目的として作成した。

##### 2 マップの作成方法

本マップの作成に際しては、国土地理院が



## V.おわりに

本論文では吾妻子の滝の成因を空中判読や現地調査を通して考察し、図や写真を用いて紹介した。また、歴史的背景を踏まえた西条散歩マップを作成した。しかし、研究を通して今後の課題も見えてきた。それは呉水の石標の行く末である。本調査では三永水源地周辺部の石標を複数見つけ、呉水の石標は平原浄水場まで続いていると予測を立てたが、本当に続いているかどうかの確証はない。それが明らかになれば戦時中における三永水源地から呉までの給水事情がより鮮明になることが予

想される。それは東広島市における戦時中の暮らしや土地利用の解明につながる。今後は呉水の石標について研究してみたい。

### 【謝辞】

本研究を進めるに当たり、広島大学大学院教育学研究科の熊原康博教授からは多大な助言を賜りました。また、広島大学大学院教育学研究科大学院生の横川知司氏、岩佐佳哉氏、富田大智氏、原田歩氏には、過去の研究の情報や、本稿の執筆の方法に至るまでご教示を賜りました。厚く感謝を申し上げます。

【参考文献】

- 東元定雄・松浦浩久・水野清秀・河田清雄(1985)『呉地域の地質』68
- 中田高・町田伸一(1989)『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報』VII 付編 西条盆地およびその周辺地域の湖成段丘とその発達過程、75-79
- 大上裕士(1993)「才が迫遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』IX、広島県埋蔵文化財調査センター、19-44
- 出野上 靖(2003)『原の谷古墳・原の谷遺跡発掘調査報告書』東広島市教育文化振興事業団
- 松崎寿和(1979)「古墳時代」『広島県史』考古編、広島県、424、436
- 古瀬清秀(1991)「安芸」近藤義郎編『前方後円墳集成』中国四国編、山川出版社、92-94
- 藤野次史(2015)「東広島市丸山神社古墳群の測量調査」『広島大学埋蔵文化財調査研究紀要』第6号、広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門、97-134
- 古瀬清秀編(2010)『千人塚古墳』東広島市教育委員会・広島大学文学研究科考古学研究室
- 石井隆博編(2004)『史跡三ッ城古墳発掘調査報告書』東広島市教育文化振興事業団
- 石井隆博(1990)「まとめ」『森信第10号古墳発掘調査報告書』東広島市教育委員会、16-19
- 石井隆博(1992)「助平古墳」『西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』東広島市教育委員会、81-97
- 恵谷泰典(1994)「原田岡山古墳群」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』X、広島県埋蔵文化財調査センター、139-155
- 脇坂光彦(1997)「御菌宇龍王山古墳の発掘調査」『芸備』第26集、芸備友の会、120-147
- 永野智朗(2018)「東広島市長者スクモ塚第2号古墳測量調査」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室紀要』第10号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、71-86
- 古瀬清秀(1991)「安芸」近藤義郎編『前方後円墳集成』中国四国編、山川出版社、92-94
- 川西宏之(1978)「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号、1-70
- 広瀬和雄(1991)「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』中国四国編、山川出版社、24-26
- 「東広島市 HP 菖蒲の前伝説」  
([http://www.city.higashihiroshima.lg.jp/school/hara\\_sho/kokoro/1/4726.html](http://www.city.higashihiroshima.lg.jp/school/hara_sho/kokoro/1/4726.html) 最終閲覧日 2020/01/29)
- 西澤考次「源三位頼政の室、菖蒲の前と猪俣太」不明
- 藤沢理照(1976)
- 「安芸の国 源三位頼政公と菖蒲の前並びに系累三戸一族」
- 東広島市郷土史研究会(1997)：『東広島歴史事典』
- 飯田米秋(1981)：『ふるさとの思い出写真集 明治大正昭和 東広島』
- 呉市水道局(1960)：『呉市水道史[第1巻]』
- 呉市水道局(2018)：『呉の水道100年』